

連載小説「女装強要妄想ノート」

9. 4月第4週（下） 「男装から少しずつ女児女装させられる」

（1）

妹の亜弓とともに母親に連れられて、駅前へと買い物に来た真弓。

女児服女装ではなく高校の男子制服を着ていってもよいとの話で、すっかり気を緩めていた彼だったが、待っていたのは最初から女装してるよりも恥ずかしい「段々に女装させられていく」シチュエーションであった。男子制服のまま女児用シューズに履き替え、女児下着売り場で下着を交換する羞恥は、萌から女装させられているのとはまた違った辱めだ。

「女児服女装で駅間を連れまわされる」——例の「女装妄想ノート」にそんな一文を書いて、妄想で抜いていた真弓にとっても、また格別だった。

さらに靴と下着だけでは終わらず、

「次はどうぜん、お洋服でしょ？」

母親は当たり前のように、次は女児服ショップへと連れて行くことを宣言していたが――

あれは嘘だった。

「本日の髪型はどのようにされますかー？」

「え、ええと……」

椅子の後ろから正面の鏡越しに覗き込む女性美容師の笑顔に、真弓は顔をひきつらせた。

駅ビル近くにある、オシャレな美容室。ガラス張りで開放感のある店内は、大きな鏡の前に5台のチェアが置かれ、美容師たちがお客のスタイリングをおこなっている。どちらも若い女性が多く、

（うう、オシャレすぎて落ち着かない……！）

日頃は長い付き合いの個人美容室で済ませている真弓にとっては、居心地が悪いことこの上ない。

ならなぜこの店に入ったのかといえば、いまは待合室で雑誌を読んでいる母親と妹が、真弓をこのお店に連れ込んで、とある髪型にしてもらうよう指示したからだった。

つまり――

「……ルで、おねがい、します……」

「え？」

「つ――ツインテールで、お願い、しますっ……！」

絞り出した声に、すぐ後ろにいた美容師さんはもちろん、雑談していた他の客や美容師たちも水を打ったように静まり返って、振り返りこそしていないもののじっと耳をそばだてている。

「……………」

あまりにも気まずい空気に、真弓は真っ赤になって縮こまる。

シューズと下着こそ女兒用のものとはいえ、服装はいまだに高校の男子制服。ツインテールを頼むのは、あまりにも奇異である。

（ううっ、こんなことなら、ほんとに最初から女児女装で連れ出された方がましだったじゃないか……！）

太ももの上に置いた手を、ぎゅっと握りしめていると――

「ふふっ、かしこまりました。ヘアゴムなどはお持ちですか？」

職業意識のなせる業か、美容師はニッコリ笑顔を浮かべて、何事もないかのように尋ねる。

真弓は逆に一瞬戸惑ったものの、

「は、はい」

ポケットから取り出したのは――赤いリボンのついたヘアゴム。母親に「これでお願いなさい」と持たされたものだ。

美容師は笑顔のまま受け取って、

「かしこまりました。可愛く仕上げて差し上げますね。まずは洗髪から――」

そう言ってチェアのリクライニングを下げ、真弓の髪を洗い始めた。シャンプーしながら、好奇心旺盛に話しかける。

「とても長い髪ですね。お手入れ、大変でしょう？」

「え、ええ、まあ」

「ふふっ、男の子なのにこんなに長く伸ばしてるなんて――やっぱり、女の子の長い髪に憧れてたからですか？」

「う……は、はい……」

素直に答えると、美容師さんはますます嬉しそうに笑った。

「髪が長いといろいろアレンジできて楽しいですからね。ツインテール、三つ編み、ハーフアップ、ポニーテール――おうちでも、可愛い髪形にされてるんですか？」

「その……お、おさげとか、三つ編みとか……」

「まあ。お客様、とっても可愛いですからお似合いでしょうね。お洋服も？」

「う……は、はい……家では、女の子の、服を……」

恥ずかしさのあまり嘘でごまかすことすら思いつかず、真弓は聞かれるまま正直に答えてしまう。

美容師さんは嬉しそうに、

「ふふっ、それはぜひ見てみたいです。それじゃあ、シャンプーをお流しします。椅子を倒しますね——」

なおも話しかけながら、真弓の髪を覆うシャンプーの泡を洗い流してゆくのだった。

(2)

「うう、ツインテール……」

ヘアセットを済ませて美容室から出たところで、真弓は落ち着かなげに側頭部に手をやった。

もともと長い髪を左右の高い位置でひつつめ、赤いリボンのついたヘアゴムで括って垂れさがるツインテールだ。スタイリストの腕もあって実に艶やかに決まっているのだが、真弓の表情は晴れない。

何しろ街を歩いていると、視線があちこちから突き刺さるのを感じるのだ。ツインテール自体は、それほど珍しい髪形ではない。大の大人やがしていれば多少は人目を引いたろうが、140センチ足らずで容姿も美少女めいている真弓であればほとんど違和感はなかっただろう。

しかし、問題は——

「どうしたの、お兄ちゃん。せっかくかわいい髪形にしてもらったのに」

すぐ隣の妹に訊かれ、真弓はいよいよ恨みがましそうな眼つきになる。

「わ、わかってるくせに……っ！」

「えー、わかんないなー。どうしてお兄ちゃん、そんな不機嫌なのー？」

「だ、だって、こんな、ただでさえ、いかにも女の子って感じで、恥ずかしいのに……」

真弓はいっしゅん口ごもってから、

「こんな——男子高校生の服装のままだなんてっ、中途半端な、状態で……！」

絞り出すように、そう言った。

赤いリボンのヘアゴムがついたツインテールに、黒のハートバックルシューズ。下着も女兒アニメ柄のキャミソールとショーツのセットに、レースのついたショートソックス——ここまで女兒物でそろえているにもかかわらず、肝心の服が、高校の男性制服のままだのだ。そのせいで、男子とも女子ともつかないような、小学生の妹がそのまま兄の制服を着せられ

ているような、実にちぐはぐな状態になってしまっているのである。

それでも先ほどまでは、表から見えるのはシューズだけだったからよくよく注意しなければ目立たなかったのだが——ツインテールのせいで、何もかもが台無しである。

「ふふっ、やっぱり中途半端な状態は、よくないわよね」

母親はにこにここと、いよいよ本当の目的に向かって誘導する。

「どうせなら、ちゃんと服装まで、女の子らしくしないと。というわけで——駅ビルの女児服売り場に、行きましょうか」

「う、うう……出かけるときは、『まだ女装させない』って、言ってたのに……最初っから、このつもりで……」

「ええ。『まだ』とは言ったけど、『このお出かけでは女装しなくていい』なんて言ってないもの」

母親は悪びれる様子もなく、さらにとんでもないことを付け加える。

「それになにより——旅行の前に、女の子でのお出かけに慣れておかないとね」

まんまと嵌められた——今さらながら気づいた真弓は唇を尖らせながら、逃げることも引き返すこともできず、おとなしく母親の後について、駅ビルへと向かっていく。

だんだん増える人と視線に、真弓はいっそう委縮しながらも、

「旅行……さっきも言ってたけど、ほ、ほんとにオレ——あ、あたしお、女の子の格好で、旅行に行かないとダメ……？ さすがにちょっと、恥ずかしすぎるんだけど……」

真弓の家では、ゴールデンウィーク中に小旅行に行くのが習わしになっている。だいたい日帰りか一泊二日で、関東近郊の観光地に行くのだが、もちろん女装して出かけたことなどない。出先での女装に不安を感じるのはとうぜんだったが、

「くすくすっ、お兄ちゃんったら、心にもないことばかり」

妹は、そんな兄の反応を鼻で笑う。

「あのノートにも、ちゃーんと書いてたくせに。『GW中の旅行に、女装したまま連れて行かれる』だっけ？」

「あ、亜弓っ……！」

痛いところを突かれて、真弓の顔が真っ赤になる。

「ノート」とは、真弓がこっそりと、「こんな風に女装させられたい」というシチュエーションを書き溜めていたものだった。先月母親に見つかってからというもの、リビングのマガジンラックに陳列されるという辱めを受けたあげく、そのノートをもとにあれこれ女装させられているのだ。

（もともと自分が書いたものだから、「こういう風にされたいんでしょ」って言われたら断りづらいし……でも、思った以上に恥ずかしいし……）

（いまじゃもう、学校に行くとき以外はずっと女装で、恥ずかしいったらないよ……）

(しかも、恥ずかしいだけでなく――)

「うっ……！」

男子制服のズボンの内側、さらに言えばその下に穿いている女兒アニメプリントショーツの中で、先ほど欲望を吐き出したばかりの雄が、再び疼き始める。

もともと例の「ノート」も、女装させられるシチュエーションの妄想でオナニーするためのものだったのだ。それが実現してしまったからには、昂奮するなという方が不可能だった。しかも、女子小学生に間違えられるほどの容姿にもかかわらず、彼の男性機能は立派なもので――

(うう、さっき出したばかりなのに、気を抜くと、また勃っちゃいそう……)

(我慢、我慢……せめて家に帰るまでは、もう勃起しないように気を付けないと……！)

真弓は必死で自分に言い聞かせながら、間近に迫った駅ビルを見上げるのだった。

(3)

駅ビルの8階。書籍・文具売り場とフロアを二分するように、女兒服売り場が設けられている。

その一角に、真弓の母親がひいきにしている女兒服ブランド――「アンジェリック・ベイビー」があった。

「いらっしやいませ、佐々木様――あら」

春物新作のディスプレイが並ぶ店頭で出迎えた店員も、真弓の一家とは面識がある。いつものようににこやかに出迎えかけたが、すぐに目を丸くして、

「あの、真弓くん……ですね？」

「う……は、はい……」

店員の反応に、真弓は赤面する。高校の男子制服にツインテール、しかも足元は女兒用シューズとくれば、おかしい目で見られて当然だ。

(もしかしたら、怒られて、お店から追い出されちゃうんじゃない――)

そんな危惧に竦みあがっていると、

「ふふっ、とてもお似合いですよ、真弓くん。後ろで束ねただけより、ずっと可愛いわ」

「えっ……？ あ、あの……似合って……？」

「はい。着ているのが男子制服なのは残念だけど――ふふっ、お洋服、うちで見てくださるんですよね？」

「それは……その、はい……」

真弓は耳まで真っ赤になってうなずいた。ツインテールにされてしまった以上、ここで女

児服に着替えて帰るしかない。

母親も笑顔で、

「ええ、そのつもりよ。外を歩くのは初めてだから、お手柔らかにね」

「かしこまりました。なら、そうですね、最初なら、パンツタイプなどいかがでしょう？」

「真弓、どう？ パンツタイプでいい？ それともスカートやワンピースを——」

「パ、パンツでいいです！」

真弓が上ずった声で答えると、

「ふふっ、かしこまりました。それでは、こちらにどうぞ」

店員は言って、真弓たちを店内の一角——スカートが中心のボトムス売り場の中では比較的小さい、パンツ売り場へと案内しはじめた。

「そういえば——おうちの中では、もう女の子の格好を？」

「ええ。先月からちょっとずつ、ね。本人もずっと、女の子の格好がしたかったみたいで。ノートにこっそり、女装させられることを考えていろいろ書いてたみたいなのよ」

「まあ、まあ」

店員の視線に、真弓はへビに睨まれたうさぎのように身を震わせた。

「それなら早く言ってくだされば、亜弓ちゃんとの姉妹コーデとか、色々楽しめたでしょうに」

「ほんとに、もったいないわ。ね、亜弓、いまから——」

「あたしは嫌だからね。これからはお兄ちゃんに着せてあげてちょうだい」

「まあ、残念ですわ。ふふっ、でも亜弓ちゃんが卒業しても、真弓ちゃんが着てくれるなら嬉しい限りです」

（うう……家で女装してることや、ノートのことまでばらされちゃった……ぜったい、変態だって思われてる……！）

（でも、最初はパンツにしてもらえるみたいで、まだ助かった。最初からふりふりのブラウスや、短いスカートや、女の子らしいワンピースをって言われたら、どうしようかと思ったけど……）

しかし真弓はパンツ売り場に来てすぐ、そんな自分の考えが甘かったことを思い知る。

「うっ……」

淡いピンクのギンガムチェックで、裾の内側にレースのついたキュロット。

お尻ポケットにブランドロゴが入った、花柄の七分丈パンツ。

たくさんのリボンがサスペンダーについた、真紅のかぼちゃパンツ。

どれもこれも、スカートに決して劣らない可愛らしさ。いや、スカートではないからこそ、しっかり女の子らしさを強調するデザインを取り入れているというべきか。

「さ、真弓。気に入ったのを選んでいいわよ」

(そんなこと言われても——これじゃ、恥ずかしいのはスカートと大して変わらないじゃないか……！)

並ぶ商品に、少しでもマシなものはないかと目を彷徨わせる真弓。しかしよさそうなものが見つかるどころか、次から次へと可愛いパンツを目にして、それを穿いている自分を想像してしまい、恥ずかしさがこみ上げるばかりだった。

「あらあら、お兄ちゃんったら、可愛いお洋服ばかりで目移りしちゃってるみたい」

亜弓はくすくす笑って、

「ま、ゆっくり選ぶといいわ。他のお客さんたちが見てる前で——ね」

「っ！？」

言われてようやく、店内にちらほらと見える客の陰に気付く。

主に小さな女の子を連れた母子連れ。彼らの目は商品を見つつも、ちらちらとこちらに視線を向けていて、「ツインテールにして幼児服を選びに来た男子高校生」に、抑えきれぬ好奇心を抱いているのが分かる。

(あんまり長いあいだ選んでたら、ますますたくさんの人に、この恥ずかしい姿を見られちゃう——)

「う……じゃ、じゃあ、これにする——」

いよいよ焦った真弓は、売り場の中では一番大人しいように見える七分丈のパンツを選んだ。

色は水色の無地。肩紐と裾についているフリルと、右ポケットのところに入っているブランドロゴ以外は、比較のおとなしいデザインだ。

(でも、もっと可愛いのを選べって言われたら、どうしよう——)

そんな懸念が頭をよぎるが、

「あら、いいじゃない。そのパンツ」

意外なことに母親はあっさりとうなずいて、

「とっても可愛いわよね。——お尻のところにフリルがついてて、まるでベビー服みたいで」

「えっ……！？」

言われて真弓は、慌てて商品の側面に回り込む。

正面からしか見ていなかったために気付かなかった。そのパンツのお尻側には3段フリルと、その間に挟まってレースがあしらわれていて、まるでベビー服のようなデザインになっていたのだった。

「な……何でそんなところに、フリルが……！？ そんなデザイン、見たことない……」

正面から見て選んだパンツのお尻側に、フリルがついていることに驚く真弓。

「ふふっ、実はこれ、本当はトドラー向けの商品だったんです。でも、ちょっと前に本社で『これからは可愛いデザインで、もっと大きい商品を展開していこう』との方針が決まりまして、試しに140サイズもご用意しているんです。ほら、あっちにも同じデザインのがあるでしょう？」

少し離れた場所にある商品を指さす店員。確かにそこには同じデザインの、ただしサイズは90から110センチの商品が並んでいた。

「そんな……じゃあそれ、ほんとは、幼稚園児とかの……！」

絶句する真弓。

「さ、真弓。次は、トップスも選びましょうか。うーん、このパンツに合わせるなら、ブラウスよりもトレーナーの方がいいかしらね」

「あれなんていいんじゃない？」

亜弓が指さしたのは、隣の棚に平置きされていたトレーナーだ。色はオフホワイトで、丸首の襟ぐりと、肩にギャザーが入った長袖の袖口にレースがあしらわれ、胸元にピンクの刺繍でブランドロゴが入っただけのトレーナー。

こちらもシンプルと見せかけて、背中側には大きくスリットが入り、そこからフリルが覗いているという、パンツとよく似たデザインになっていた。

「うん、ぴったりね。それじゃ真弓、さっそく着替えていらっしやい」

お尻にフリルのついた水色の肩ひも付きパンツ。背中側にフリルがあしらわれた丸首トレーナー。

二着を手渡されて、

「こ、これを、オレが——」

真弓は目を白黒させながら口ごもる。

いくらパンツとはいえ女児服を、それも家の外で家族以外の人に見られながら切ることには、改めて恥ずかしさが湧き上がり、今すぐやめたい気持ちでいっぱいになる。しかし、

「いやならそのままの格好で駅前を歩いて、おうちに帰ることになるけどいい？」

「うっ……」

高校の男子制服にツインテール——あまりにもちぐはぐな格好で人目を集めるよりは、ずっとマシだろう。先ほどそう判断したからこそ、こうして大人しく女児服売り場についてきたのだ。

「き、着替え、ます……」

真弓は絞り出すように言って、店員に試着室へと案内してもらったのだ。

カーテンが閉まってようやく一人きりになった真弓は、ほんの少し安堵する——が、改め

て鏡に映るツインテール男子高校生の姿に、

（オレ、こんな格好で外を歩いてたんだ）

（確かにこれに比べたら、いっそ女兒服の方が、ずっとましかもしれない）

（でも……やっぱ、恥ずかしいよ……！）

ブレザーを脱ぎ、ネクタイを外し、ズボンを脱ぎ、シャツを脱ぎ——その下から現れたのは、女兒向けアニメのキャミソールとショーツ、レースのついたソックス。こうなるとツインテールのおかげもあって、女兒にしか見えない。

ただ一点——ショーツの前方に張り出したテントを除いては。

「う……これ、パンツの上からでも勃起が見えちゃうんじゃ……？」

不安になりながらも、しかしいまここで性処理するわけにもいかない。真弓はまずトレーナーを着て、襟ぐりや袖口にあしらわれたレースに心をくすぐられつつ、いよいよパンツに取り掛かる。

パンツといっても男物と違い、ファスナーがついているのは左側。しかもその肩紐や裾、さらにお尻側にフリルがついているのだから、「パンツなら男物と大差ないだろう」などとはとても言えない恥ずかしさだった。

（いっそスカートの方がましだったんじゃない？ い、いや、それもそれで恥ずかしいし、何よりも、替えられないんだから……）

肩紐を落として足を通し、腰まで引き上げ——真弓はそこでさらに、男物のズボンとの違いを思い知る。

（これ、ピッチピチになっちゃう……！）

はるかに細身で、ぴったりと脚に密着する着心地。普段はどんなに細身のものを選んでみただぼだぼになってしまう彼には、脚のラインを際立たせるデザインのパンツなど、全く未知の穿き心地だった。

「うっ……」

なるべく余計なことは考えないようにして、まずはファスナーを閉じ、フリルのついた肩紐をかける。前側は垂直、後ろ側は交差するようなデザインだ。

真弓は鏡に向かい、改めて自分の姿を確認する。

「こ、これでよし……でも……」

一見シンプルな、白いトレーナーと、水色のパンツのコーディネート。しかし胸元やウエストに女兒服ブランドのロゴが入っていたり、あちこちにフリルやレースがあしらわれていたり、なによりお尻にフリルがついていたり、よく見れば女の子らしい要素がたっぷり入っている。

（確かにノートには、女兒服でお出かけさせられるって書いたことがあるし、その想像で抜いたりもしてたけど——じっさいにこうして女兒服を着て、外を歩くなんて恥ずかしすぎ

るよ……！)

(で、でも……恥ずかしすぎるせいで、チンコは、目立たなくなってくれた、かな……?)

パンツの前方に先ほどまで浮かんでいたシルエットは、よく注意しなければわからない程度に収まっている。

「あとはなるべく女の子のふりをしていれば、目立たなくて済むはず……それもそれで恥ずかしいけど……」

ツインテールに女兒服と、女兒シューズ——すっかり女の子になってしまった自分の姿に決意を固めて、真弓は試着室を出るのだった。

(5)

脱いだ男子制服を片手で抱え、カーテンを開いてすぐ、待ち構えていた母親と店員が歓声をあげる。

「まあ、可愛い」

「とてもお似合いですよ、真弓くん」

「う……あ、ありがと——!？」

恥じらいながらもシューズを履いて試着室から出た真弓は、ビクッと立ちすくむ。

(み、見られてる……!)

近くにいる客たちが、じっと自分を見つめている。先ほど女兒服をもって試着室に入ったツインテールの男子高校生が、いったいどんな変身を遂げるのか、見てやろうというわけだ。

「へえ、可愛くなっちゃったわねえ……」

「ほんと、男子高校生とは思えないわ」

「あのお兄ちゃん、お姉ちゃんになっちゃったの？」

親子連れの声に、真弓はいっそう赤くなる。今すぐ逃げ出したい気持ちでいっぱいだったが、試着中なのでそれもできず、多くの視線に犯されているかのような辱めに耐えなければならなかった。

そんな真弓の気を知ってか知らずか、母親はのほほんと笑って、

「ふふっ、これなら女の子として旅行にお出かけしても、問題なさそうね。一泊二日だからもう一着——そうね、もう一枚はスカートかワンピースを選びましょうか」

「う……は、はい……」

スカートでの外出からは逃れられないことを悟り、真弓は呻くように答えるのだった。

*

「くすくすっ、よく我慢できたねえ、お兄ちゃん」

「やっ、やめてよ、亜弓っ……！」

帰りの、車の中。

駅ビル女兒服売り場での用事を済ませてから、最上階のレストランで食事し、その後も手芸専門店やら書店やら文具売り場やらと連れまわされたのちに、真弓はようやく帰路についた。

公衆の目からようやく解放され、母親の運転する車の後部座席で、真弓はやっと一息つくことができ——同時に、いままで緊張によって抑圧されていたものが一気に膨張を開始した。

「うっ……！」

可愛らしい水色の女兒用パンツの股間を押し上げる、少年の猛き欲望。ぴっちりとした構造で物理的に押さえつけているにもかかわらず、生地を破らんばかりの勢いで屹立しようとする。女兒服を着せられ、たくさんの人の前を歩かされたことで蓄積された劣情は、触るところか取り出してすらいらない状態にもかかわらず、文字通り一触即発の状態だ。

それはとうぜん、隣に座っている亜弓にはすぐにバレてしまい——

「車の中に入ったとたんに、こんなにおっきくしちゃうなんてね。やっぱりお兄ちゃん、可愛い女の子の服が大好きなんだ」

「ち、ちがっ……さ、触らないでよ、前に、母さんが——」

真弓は暴発寸前の股間を妹の魔手からガードしつつ、運転席でハンドルを握る母親に目をやる。確実に聞こえているはずだが、運転に集中しているのか何も言わない。

「気づいてないみたいだからヘーキヘーキ。ほーら、気が散ってると、こっちがお留守になっちゃうよ？」

「ひっ……！」

ガードの隙間からもぐりこんだ妹の手が、ついに真弓の股間をとらえた。パンツの上から蓋をするように握りこまれて、すでに臨界直前に達していた肉棒が一気に熱暴走する。

「ぐっ……あ、あ、あ……！」

射精をこらえようと奥歯を食いしばったものの、それは最後の悪あがきに過ぎなかった。オーバーヒートした炉心はたちまちに理性を熔解させ、激しい痙攣それ自体がさらなる刺激となって制御不可能な性感を生み出して、致命的な暴発へと突き進む。

どっ、と股間が爆発するような衝撃とともに、真弓のパンツの中が一気に濡れて、青臭い匂いが車内に漂い始める。

「っ、んうっ……！」

とっさに口を押さえたため、悲鳴と喘ぎ声だけは何とか漏らさずに済んだのは上出来だ

ろう。しかし代わりに、股間からは大量の精液が漏れ出して、下着どころかパンツすらも貫通し、上から握りこんでいた亜弓の掌底へと達していた。

「くすくすっ、お兄ちゃんってば、ちょっと触っただけなのにおもらししちゃうなんて」

亜弓は兄を射精させたばかりの掌を鼻先に近づけると、くんくんと匂いを嗅いで嫌そうな顔になり、

「うわっ、くっさあ〜。こんなにすぐおもらしするなら、おむつをした方がいいんじゃない？」

「こ、これはお前が触るから……！」

「あらあら、真弓、おもらししちゃったの？」

運転席から母親が、わざとらしく言う。明らかに先ほどのやり取りから聞こえていたはずなのに、たったいま聞こえるようになりましたと言わんばかりだ。

「そういえばトイレにも行ってなかったし、女子トイレに入るのが恥ずかしいからって、我慢しちゃダメよ？ ちゃんと行かなくちゃ」

「ち、ちが——」

否定しようと口を開きかけるものの、本当のことを説明するわけにもいかない。

真弓が黙り込んでいるのをいいことに、

「くすくすっ、ほんとにあんまりおもらしするようなら、おむつにしないとダメかもね。大丈夫よ、お兄ちゃん。最近はお兄ちゃんも穿けるような、おっきくてかわいい紙おむつもたくさんあるから」

「ええ。いざとなったら布おむつカバーも作ってあげるから、安心なさい」

「な、なにをどう安心しろって言うんだよお……」

濡れた股間の情けなさに心を辱められているため強く抗弁もできず、ぼやくので精いっぱい真弓であった。

(続く)